

会津只見の中門造り民家における構法と技術継承に関する研究

会津大学短期大学部

産業情報学科

柴崎 恭秀

会津只見の中門造り民家における構法と技術継承に関する研究

柴崎 恭秀

平成29年1月10日受付

【要旨】 会津只見地域には、積雪地としての工夫が随所にみられる中門造り民家が現在も数多く残っている。また、この地域には大工が継承してきた番匠巻物が現在も保存されており、技術継承の一端を辿ることができる。本研究では、只見地域に残る中門造り民家の実測調査を通して、この地域の民家の特徴と技術継承の経緯等について明らかにすることを目的とする。

1. 東北・北陸地域における中門造り民家について

日本の伝統的民家は、敷地に対して東西に矩形平面を配した直屋(すごや、地域によってはイッポーヤ)が一般的で、敷地北西側に常緑樹を植えて季節風を防ぐ防風林とし、南側に落葉樹を配することで夏の日差しを防ぎ冬の日差しを室内に取り込む等の工夫をしていた。直屋の平面の半分程度は土間で、農作業を行うスペースとして機能していた。これに対して平面的にL字型形状に構成したものを曲り屋として分類している。

曲り屋は、岩手県下に多くみられる民家形式の一つで、平面はL字型、突起部は広い厩で母屋と土間につながり、接合部の屋根の谷は洞(ほら)と言われる。厩の大きさは2間×2間以上、2間半×7間半程度までで、通常は「まや」と「子まや」とに分かれる。近世初期には既にあったとされている※1。

この曲り屋に対して、「中門造り」は、突出部の機能によって分類される。中門造りは、新潟、福島、山形、秋田県各地方にみられる。平面はL字型で曲り屋と同じであるが、突出部の機能が異なり、母屋への通路、厩(うまや)、便所などから成り、これは積雪時の利便性からつくり出された形式と考えられている。このほか座敷、寝部屋、台所、勝手などを突出させている場合も中門造りと称し、平面がU字形になるものを両中門、T字形になるものを木槌中門(きづちちゅうもん)、背面に中門を持つものを裏中門、中門が主として入り口になっているものを玄関中門、主として厩(うまや、まや)になっているものを厩中門、風呂や小部屋のような特に小型の突出部があるものは、出臍(でべそ)と称されている。近世初期の中門造りは、武士の住宅形式であったが、少なくとも新潟県で寛文年間(1661~73年)から本百姓層以上の民家形式として導入されたと言われている※2。

東北・北陸地方ではこの中門造りのなかでも、厩中門造りが数多くつくられたと考えられる。農耕馬を飼うことは、東北地域では様々な利点があったと考えられる。伊藤ていじ著「民家は生きてきた」(美術出版社)では、「近畿地方以西では家畜として牛が多く飼われていたが、奥羽では牛よりも馬のほうが好都合であった。牛は老いば牛肉ともなり、そのうえ婦女子にも飼育しやすいけれど、馬の方はかん気高く「じゃじゃ馬」ならしは、面倒であるのに馬を飼わねばならなかった。なぜなら奥羽の気温は低く、したがって耕作期間が短く、ことに亜熱帯性の稲は奥羽にとっては不適正品種であった。(中略)だから作業工程を早くしなければならず、即効性の肥料を用いなければならなかった。この意味では牛は不適格であった。牛は鈍重であり、牛糞は水分多く遅効性であった。しかし馬は動きが早く、馬糞は水分少なく醗酵性が高く、即効性があった」ことが指摘されている※3。

馬は農作業においては荒々しく扱いに苦勞する反面、作業性が高く即効性に富んでいたと考えられる。また、肥料の点においても東北地方の気候に合っていたことが挙げられている。只見町でのヒアリングでは、馬に代わって牛も近年では多く飼われていたということであったが、中門造りの突出部については、もともと厩であったということが多く聞かれた。

貞享元年(1684年)に会津藩村役人の佐瀬与次右衛門によって記された「会津農書」(fig. 1)には以下のような記述がある。

「厩は内厩にして、居ながら管理する様にしてよし、外厩は寒くして馬瘠る、又厩内は廣く地面を深くすべし、耕作以後秋草を澤山に刈り入、冬中馬にふませ、田植肥にすれば、外厩に不劣、殊に萱野の廣く草澤山なる所にては、多量に刈り入れる為に地面を



fig. 1 佐瀬与次右衛門著「会津農書」

深くしてよし、草不自由の所にも芝交りの塊を割り入れ積みてよし」(佐瀬与次右衛門著「会津農書」下巻・第十「厩圃」)

前述の「民家は生きてきた」でも「会津農書」についての記述がみられるが、外厩にすると馬がやせるので、内厩、つまり母屋の一部に、地面を掘り下げて秋草を十分に敷き詰め、居心地のいい場所をつくることを奨励している。この文献からも17世紀後半には厩を民家に内包していった経緯を窺い知ることができる。

2. 中門造り民家の特徴について

積雪地での民家の特徴のひとつに、軒の出を少なくする点が挙げられる。それは堆雪時に雪庇等の荷重がかかると軒が折れることが原因と考えられるが、一方では雨雪から外壁等を守るためには軒の出を深くすることが重要である。この点では新潟や会津地域の民家には「せがい」と呼ばれる出桁によって軒を深くする構法が継承されている。また、中門造り民家は、そのL字型の構造が積雪の圧力を受けたときに安定すると言われている。会津只見での分布調査では、北西側、或いは斜面側を背にしてL字型に配棟している場合が多く、季節風や積雪を考慮していることが窺える。別に、2011年の東日本大震災では、L形状の建物に顕著に被害が現れたが、これは建物重心が偏心し、地震力によって変則した力が加わったためとする専門家の意見があった。

3. 会津只見の中門造り民家の変遷について

厩中門の用語は、正徳元年(1711年)に記された会津藩「実世実記九十七」に登場し、18世紀前半までは土間であるニワ前方のウマヤと出入口を収めた下屋であったと考えられる。これが18世紀後半には、ニワ前方にL字型に棟を出し、ウマヤ・便所・通路等を配する形式が会津地方で広くみられるようになり、19世紀以後は厩中門を棟として付帯させるようになっていった。19世紀前半のものと、それ以後のものとは、取付け位置が少しずれて、これにともないニワやウエの関係やニワの機能が僅かに変化している。

18世紀中頃には、ニワの背面に水屋であるミンジャがつくられるようになり、19世紀以降にはミンジャと並んで隠居所であったとされるチュウモンが付帯されるようになる。さらに19世紀後半には、このチュウモンとミンジャが主棟から小さくL字型に突出し、さらに中二階を設けるに至っている(fig. 2) ※4。

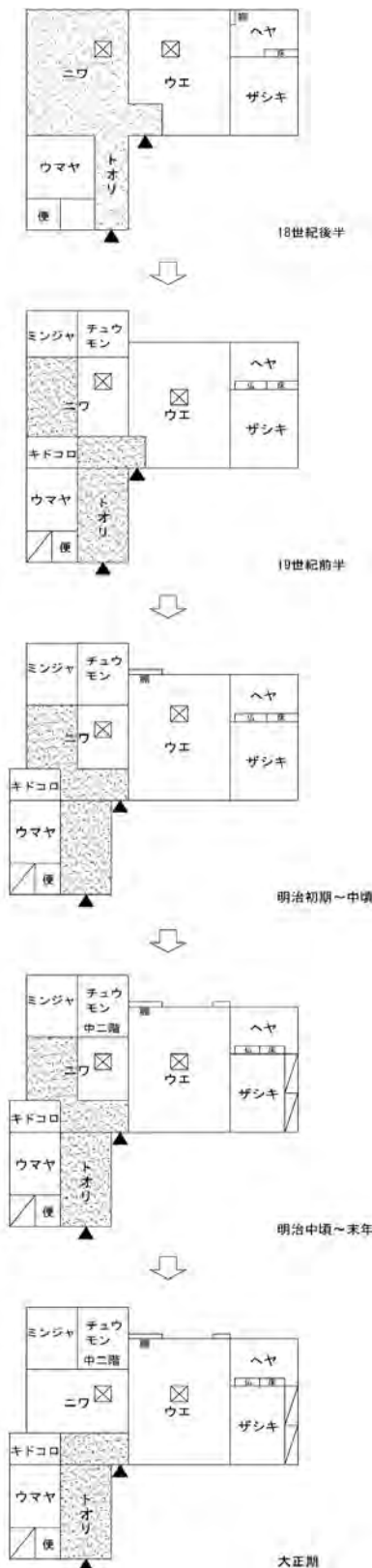


fig. 2

「湖底に沈む奥会津石伏の歴史と民俗—只見町石伏集落学術総合調査報告」(只見町1984)
石伏住居主屋類型の変遷を参考に作図

4.会津只見における中門造り民家の分布調査について

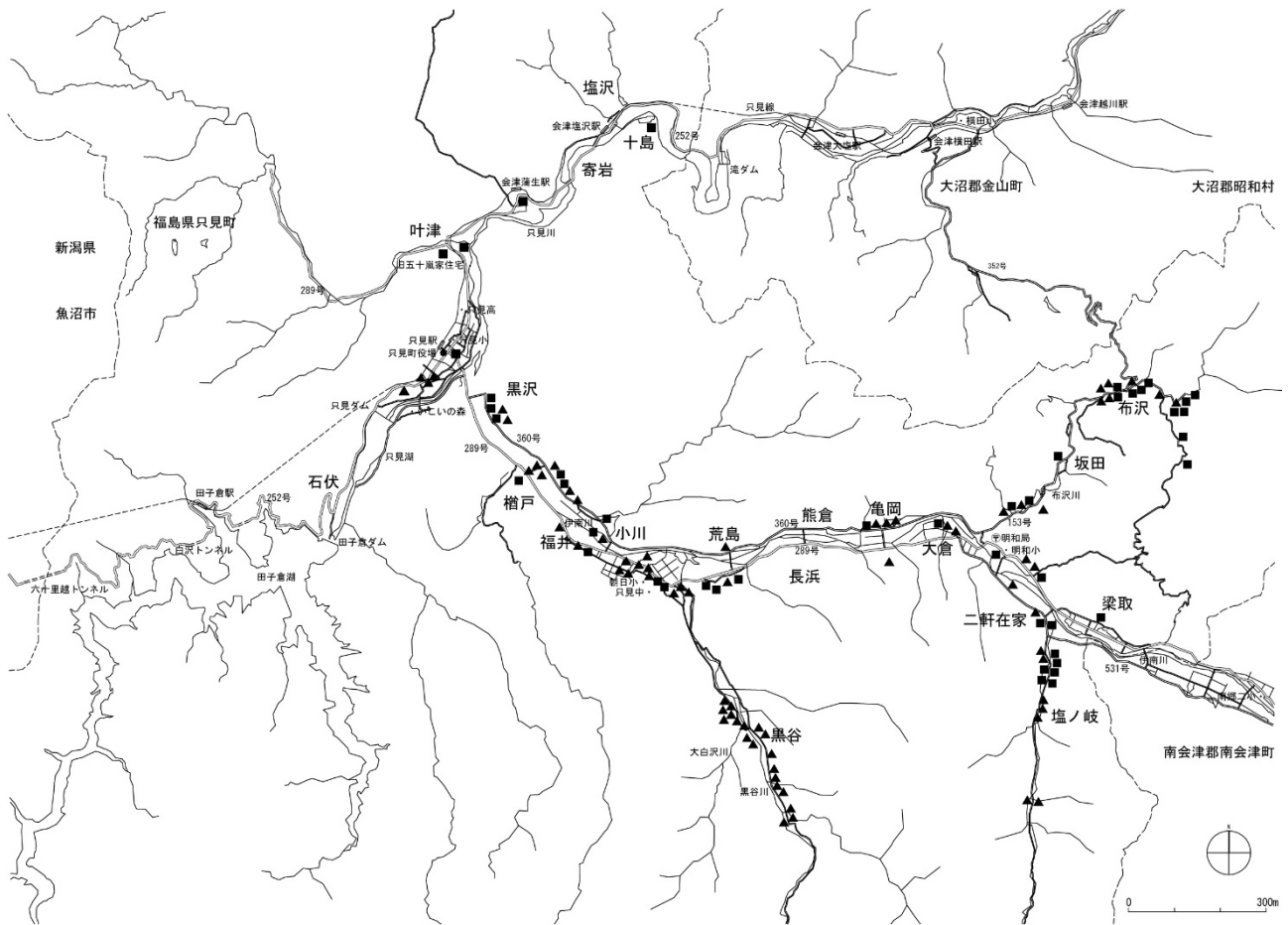


fig. 3 只見町中門造り民家プロット調査図

■既中門造り民家切妻形状 46 戸 ▲既中門造り民家兜形状 74 戸

2015年8月～11月にかけて福島県大沼郡只見町の中門造り民家の分布調査を行った。8月10～14日に予備調査、9月14～18日に分布調査、10月11・12日に追加調査、11月9～13日に補足調査を実施した。調査は筆者と学生の遠藤由紀、小山真由、高橋千紘、船木美沙、三浦望の計6名で行った。また、調査期間中に、集落の高齢者や行政、教育委員会、町史編纂や学術調査等に関わった教育委員会OB等に聞き取り調査を行った。

分布調査では、各地区の住宅地図にある住戸で、中門造り民家と認められるものをプロットし、合わせて写真撮影を行った。その後、プロットした住宅地図に撮影した外観写真を添付し、それぞれの地区でどのような中門造り民家が在ったかを紙面上で目視できるようにし分析を行った。結果は全体で120戸の中門造り民家を確認でき、うち46戸が「入母屋(主棟)+切妻形状屋根(突出部)」の中門造り民家、74戸が「入母屋(主棟)+兜屋根形状(突出部)」の中門造り民家であることが分かった(fig. 3)。

また、分布調査と聞き取り調査を合わせると以下のことが判明した。

- ・軒までの高さが高く、屋根が兜状に切り上がった兜屋根が数多く確認できる。
- ・保存対象となっている叶津番所以外は、全て茅葺き屋根の上を金属屋根で覆っている。



fig. 4 入母屋(主棟)+切妻形状屋根(突出部) 民家



fig. 5 入母屋(主棟)+兜屋根形状(突出部) 民家



fig. 6 軒先を深くしている「せがい」部分



fig. 7 民家の周囲を廻るミズボリ(水堀)



fig. 8 現在も残るセキボリ(堰堀)

- ・まがりの兜屋根の部分(二階に相当する部分)には窓が設けられていて、積雪時に出入り口として使用していた (fig. 5)。また、採光や換気窓としても機能し、特に養蚕が行われていた時代には換気窓として重要な役割を果たしていた。
- ・南会津町の前沢集落と比較すると、屋根の茅が厚く、軒の出し方に特徴があり、前沢集落が一般的な垂木による軒(前沢集落の起源は南部曲屋という話も聞き取り調査ではあった)であるのに対して、只見町の中門造り民家は「せがい」で軒を深くしていた (fig. 6)。
- ・民家外部にはオオホリ・ホリワリ(大堀・掘割)、ミズボリ(水堀)、ミンジャボリ(水屋堀)、ノミズボリ(飲水堀)という生活水路が敷設されていて、オオホリにはカバタ(川端)があり、また、室内の台所に相当するミンジャには、ミンジャボリから引かれた水場があり、上水・中水利用をしていた (fig. 7)。
- ・さらに敷地内には灌漑用のセキボリ(堰堀)やモミ種浸しのためのタナイケ(種池)、センスイ等があり、融雪池としての役割やビオトープとしての環境を成すものもあった (fig. 8)。

伊藤ていじ著「民家は生きてきた」では、地域の職能集団として、例えば陸前高田の気仙大工などの記述がみられるが、会津に関しては「渡り屋根屋」の記述がある。福島県南会津郡、大沼郡、耶麻郡一帯の山間部から出稼ぎに出る茅葺き職人をこのように呼び、特に天明4年(1784年)の大凶作を契機に増大したとしている。同様のことが「只見町史」にも記されているが、このような出稼ぎを「関東稼ぎ」と称している。只見では屋根ふき職人のことをヤネフキと呼び、関東ではカヤテ(萱手)と呼んでいた。11月から3月頃にかけて特に栃木、群馬、茨城に多く出稼ぎに行っていたため「関東稼ぎ」と呼ばれるようになり、棟梁によっては得意先が決まっていたということだった。旧石伏集落はヤネフキが多い地域で、関東稼ぎを主としていたようである。聞き取り調査では、只見の民家の特徴として茅葺屋根が厚い点が多く聞かれた。屋根葺き職人の仕事も茅葺きから現在ではトタン葺き、新建材の屋根施工に様子を变えている。

5.会津只見における中門造り民家の実測調査について

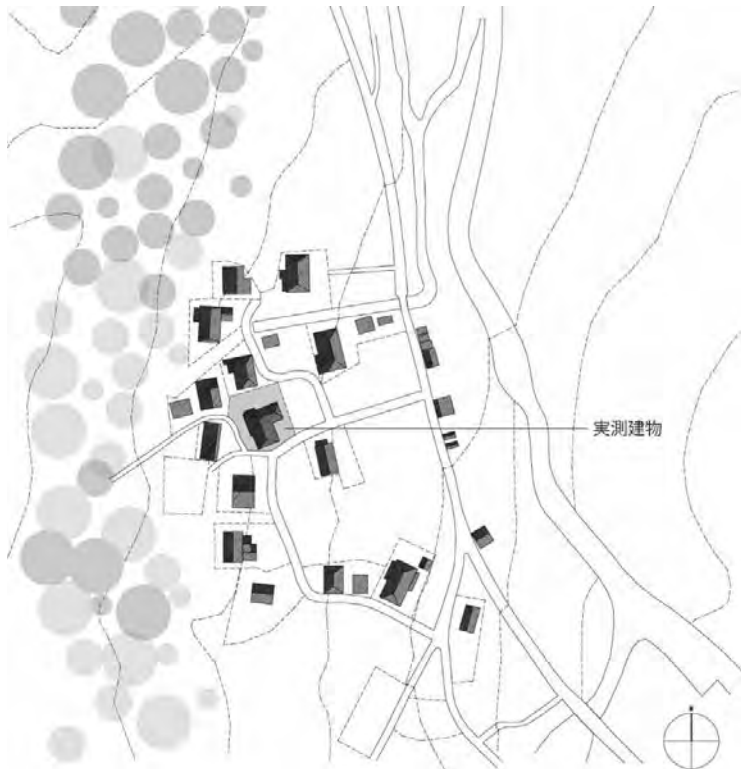


fig. 9 福島県南会津郡只見町黒谷白沢「旧船木家」位置図



fig. 10 黒谷旧船木家東側外観



fig. 11 黒谷旧船木家南側外観

実測調査は、8月10～14日に予備調査、9月14～18日と10月11・12日に実測調査、11月9～13日に補足調査を実施した。調査は筆者と学生の船木美沙の2名で行った。

実測は、福島県南会津郡只見町黒谷白沢の旧船木家を対象建物とした。黒谷の旧船木家は、現在は空き家となっており、隣接する縁戚によって管理されているが、近々に解体を予定しているということだった。今回の実測調査時に棟札を確認することができ、大正4年(1915年)11月8日に上棟していることが判明した。

「湖底に沈む奥会津石伏の歴史と民俗 一只見町石伏集落学術総合調査報告」(只見町1984年)では、石伏集落の住居が例外なく入口土間を主屋に向かって左側にする建て方(地方によってはこれを「ひだりや」と称することもある)で、住居がすべてほぼ西向きに建ち、冬季の暴風雪のための工夫から生じたものだろうとしている。

実測を行った黒谷旧船木家は、主屋に向かって右側に厩が付加された形で、主屋を西側に寄せ、季節風の吹く北西側に対してL字型の背を向けて防風を行っている。

黒谷旧船木家は、2011年7月の新潟・福島豪雨の際に黒谷川の氾濫によって床下浸水をしており、その痕跡を留めている。間取りは建設当時のままであるが、かつて厩だった廻りに下屋を付加し増築を行っている。外壁の開口部はアルミサッシに付け替えられ、空き家となった現在では雪囲いで覆われたままである。内部は以前ニワだった部分を板張りに直している。生活様式の変化に合わせて水廻りや一部の床仕上げ、天井仕上げを変更しているが、内部建具はそのまま残っている。

実測によって得られた民家の桁行、梁行は以下のようである。

実測によって得られた民家の桁行、梁行は以下のようである。

主棟 桁行7間2尺×梁行4.5間

中門棟 桁行2.5間×梁行2間5尺

(但し、後年に付加された水廻りと下屋は含まず)

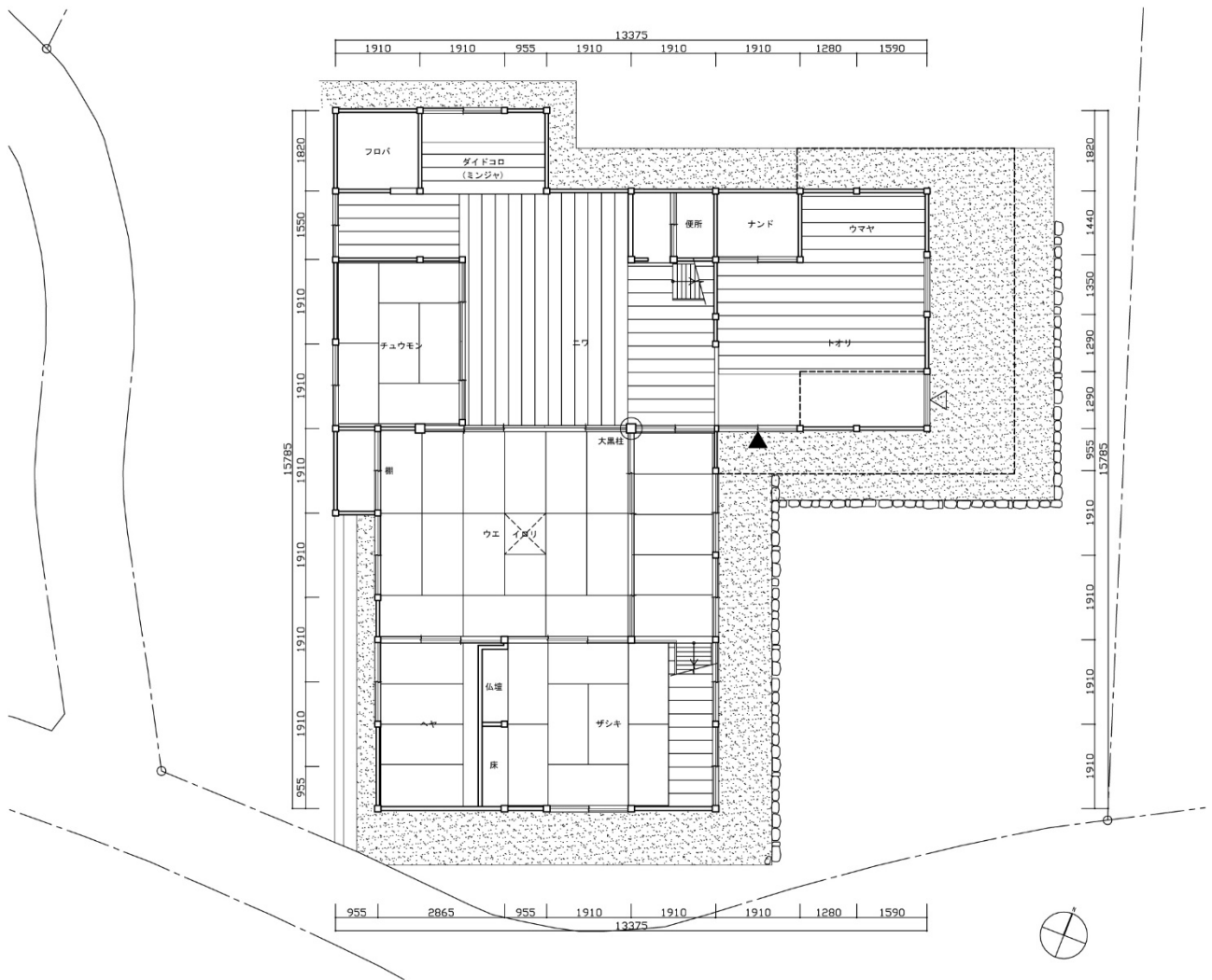


fig. 12 黒谷旧船木家 平面図 1/150

実測調査では、中門棟の廻り三辺に後年付加された下屋が外通路と納屋のため作図は行わなかった(fig. 12 点線部分)。また、北西側の水廻りは梁間をみると、やはり後年になって付加された可能性が高いが、住居の主たる部分のため作図を行っている。

実測では1間が1910mmであった。会津地域では、昭和初期頃まで1間を京間の6.5尺(1969mm)ほどは広くないが、6.3尺程度としている建物が多い。大黒柱に相当する柱は7寸、その他の柱が4.5寸と積雪を考慮して太めに設定されていると考えられる。fig. 2の変遷図の「大正期」のものに概ね合致すると考えられるが、チュウモンとミンジャに相当する部分が、外壁線から半間しか突出していない。また、チュウモンの上部に中二階はなく、中門棟からニワ天井内に小屋裏収納があり、階段はニワの中門棟側に設置されている。

ニワについては、床がすべて板張りとなっており、土間と板張りだったところの判別は難しいが、板張り方向から判断すると、入口付近の1間から中門にかけては土間であったと考えられる。ニワの板張りの部分とウエとのレベル差は180mmで、一般的にはウエと呼ばれる常居とシタと呼ばれる板間とではこの程度の段差を設けてヒエラルキーをつくることから、当時のままの段差であることが推測される。

聞き取り調査では、ウエに相当する部屋の天井は、後年になってから張られたということであった。天井高さはウエで3070mm、ニワで2500mmであった。主棟と中門棟では、床の段差を加えると天井レベルで750mmの差があり、小屋裏ではウエとニワの天井内でこの段差が生じていた。

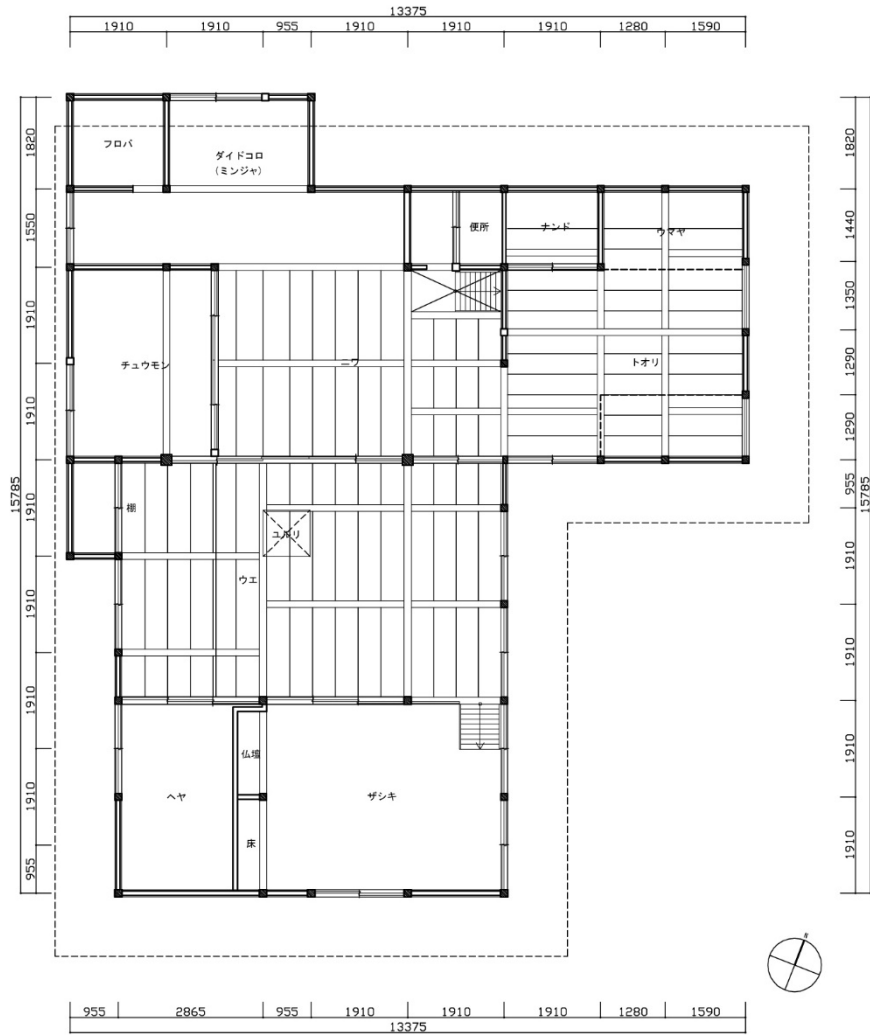


fig. 13 黒谷旧船木家 天井伏図 1/150

只見では中門造りの主棟を本屋(ホンヤ)、中門棟をマガリと呼び、本屋は河谷成りに、マガリは谷を切る方向に配して風当たりを少なく抑え、冬の通用口としたとしている。人々の空間の意識は、川上は川下に対して神聖な方位であり、マガリを本屋の川下側に設けて厩や便所を配し、本屋には常居(ジョウイ)と炊事場、屋内の作業



fig. 14 ウエの西側にある神棚



fig. 15 ウエの南側にある札張り

場等が配されている。中央の広間で常居となるウエの奥の、川上に相当する部分にザシキを設けるのが一般的である。黒谷旧船木家では、ウマヤは谷切り方向に配され、本屋は河谷と平行に配置し、鍵型に曲がるにしたがって奥まった神聖な場所として位置付けられていると考えられる。山側に向かう位置には、西宮大神宮を祭った紙棚を(fig. 14)、ウエからザシキに至る仕切りの鴨居の上には札張りを設けている(fig. 15)。奥座敷の川上に向かって設けている窓を只見の小林地区では東戸(ヒガシンド)と呼び、「神霊降臨口」として冬季もここだけは冬垣せずに開けておく習慣があるということだった※5。

本屋中央のウエは、広間、接客、ハレの間を兼ね、ニワ寄りにユルリ(囲炉裏)と一間程度の高さにヒダナ(火棚)を設けるのがこの地域では一般的であるが、黒谷旧船木家では床の板張りがされ、天井も張られていたため、天井の梁等から想定し位置を記した。

この地域では大黒柱(只見ではジョーセツパシラと呼ぶところもある)は、クリかケヤキを用いることが多く、上梁、下梁はマツやスギ、板の間の板張りにはトチやケヤキ、センノキやマツ、畳下の敷板には通気性、吸水性のよい杉を用いたとしている。只見はブナの産地であるが、明治期まではマツが多く採れ、屋材、扱首(さす)にはブナやミズキ、マツが用いられた。特にミズキは「水木」と記すことから火伏せの呪物として、この地域では屋材に用いたということであった。また、屋材の元切りには「秋切り」と「春切り」があり、秋切りは木割れがなく、春切りは割れが多いという伝承もある※5。

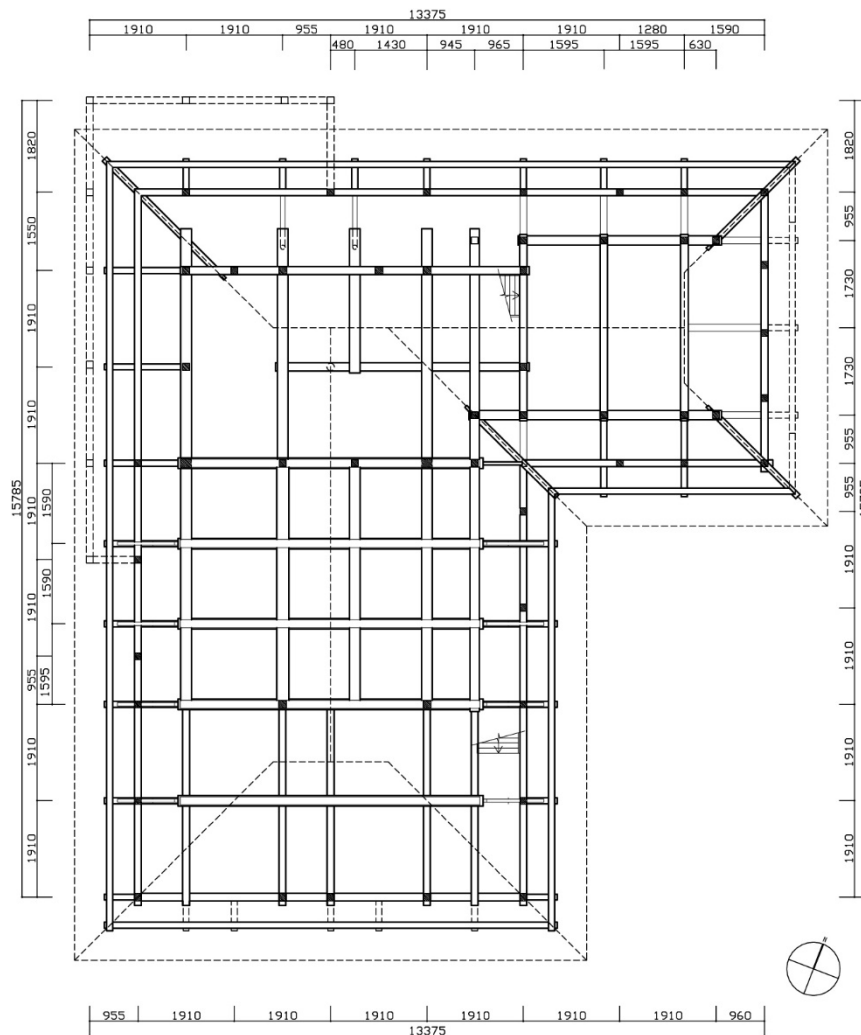


fig. 16 黒谷旧船木家 小屋伏図 1/150



fig. 18 能生歴史民俗資料館外観



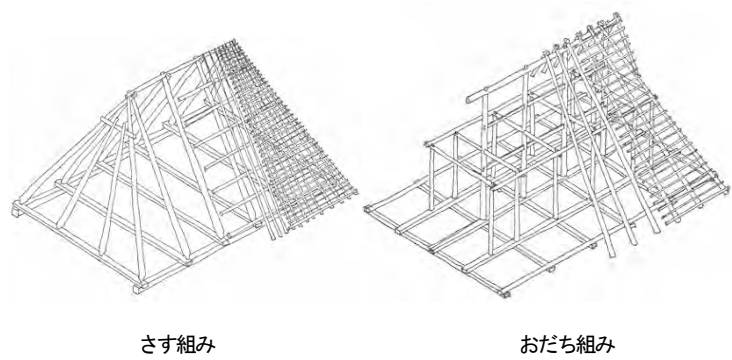
fig. 19 能生歴史民俗資料館外観



fig. 20 黒谷旧船木家 中門棟小屋裏構造



fig. 21 母屋桁と繫梁を木栓で固定している様子



さす組み

おだち組み

fig. 17 「さす組み」と「おだち組み」

安藤邦廣著「茅葺きの民俗学—生活技術としての民家」はる書房

民家の小屋組みは、大別すると fig. 17 に分けられる。さす組みは、扱首(さす)を頂部でハの字に緊結して横架材をささえる形式で、部材が少なく真束がない。これに対しておだち組みは、棟木を直接真束で支える形式で、小屋束に母屋桁を組み、中央に真束を設けている。

岐阜県白川郷の合掌造りは、60度の屋根勾配をさす組みで支えている。fig. 18・fig. 19の能生歴史民俗資料館は、新潟県糸魚川市能生谷の中野口地区より移築復元した中門造り民家であるが、60度の屋根勾配をさす組みで中門をつくったものである。

実測を行った黒谷旧船木家の屋根勾配は約45度で、小屋組は主棟、中門棟とも小屋束に母屋桁を組み、繫梁を設けて斜材である扱首(さす)を組んでいる。中門棟と主棟では天井で750mmのレベル差があり、中門棟は小屋束のレベル差の位置で軒となる「せがい」の出桁を設けている(fig. 20)。小屋束の上部に設けた母屋桁の高さを主棟と中門棟で揃え、一部の繫梁をダブルで設け、合い欠きで挟み、木栓で固定している(fig. 21)。

会津地域の民家では、小屋束上部に固定した母屋桁で、斜材である扱首を繋いでいるケースをみかける。黒谷旧船木家の小屋組み扱首も、通しの部材と母屋桁で繋いでいる部材の両方を確認した。fig. 21にある木栓に寄せて固定し、木栓を滑り止めにして、母屋桁に固定した別の斜材に置き換えているディテールもあった。

会津只見は豪雪地域で、例年3mを超える豪雪地である。屋材にかかる積雪荷重は、斜材の途中に組まれた小屋束・母屋桁・繫梁によって下部構造に伝えられている。只見では屋根の雪下ろしが遅れると扱首まで折れると言われている。黒谷旧船木家の小屋裏では、後年になって扱首を補強するための斜材が付加されており、板材などを簡易的に加工して扱首に宛がい、繫梁の上部で固定されているのを数ヶ所確認した。



fig. 22 黒谷旧船木家 東立面図 1/150



fig. 23 黒谷旧船木家 南立面図 1/150

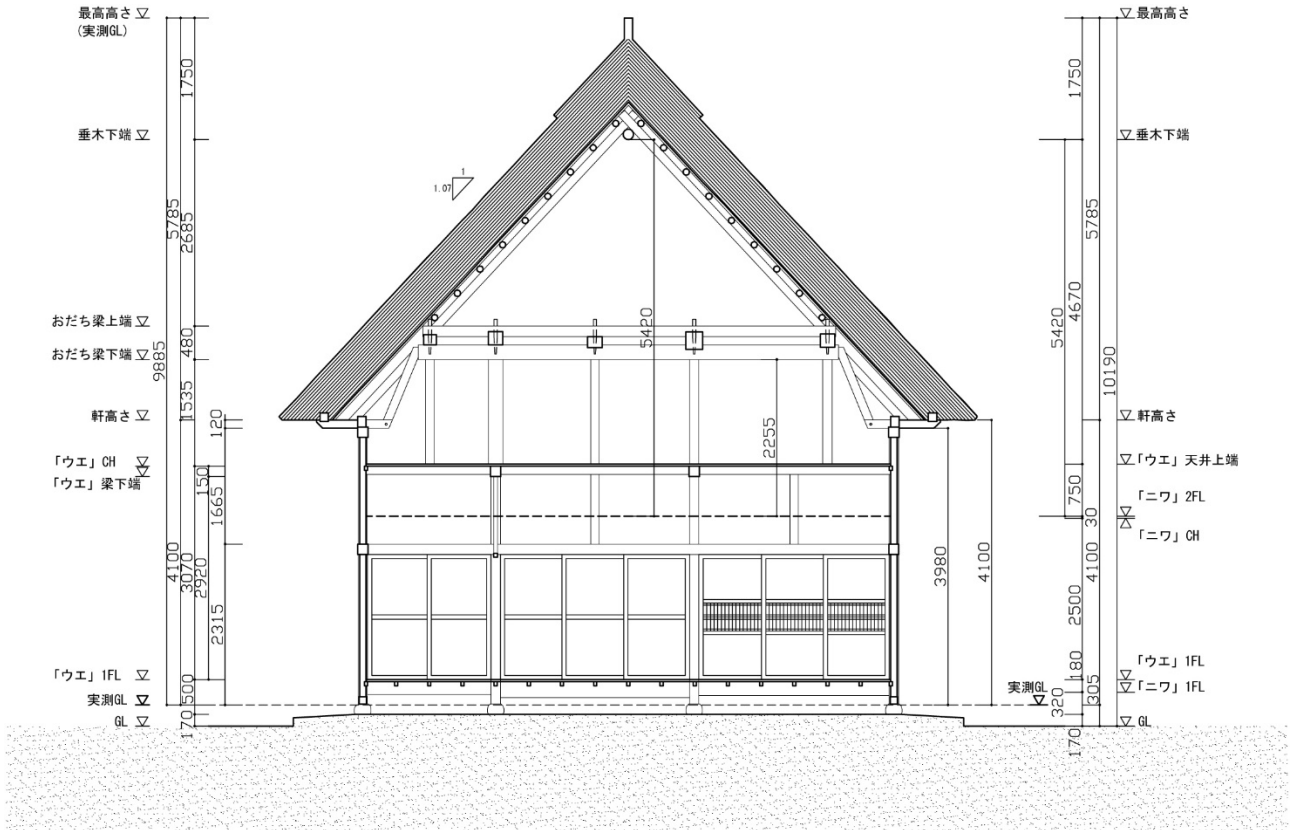


fig. 24 黒谷旧船木家 主棟梁行方向断面図 1/100

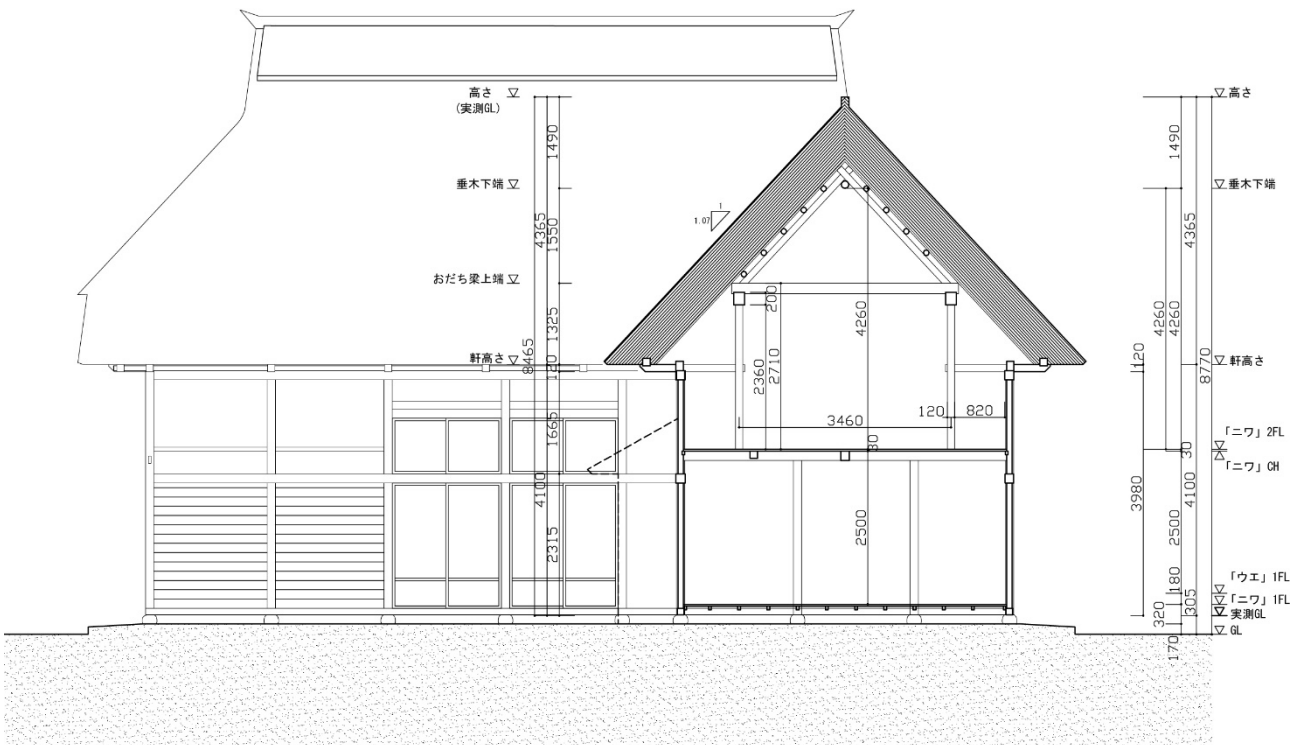


fig. 25 黒谷旧船木家 中門棟梁行方向断面図 1/100

6.黒谷旧船木家の軒先ディテールについて



fig. 26 黒谷旧船木家 三角形の軒先構造

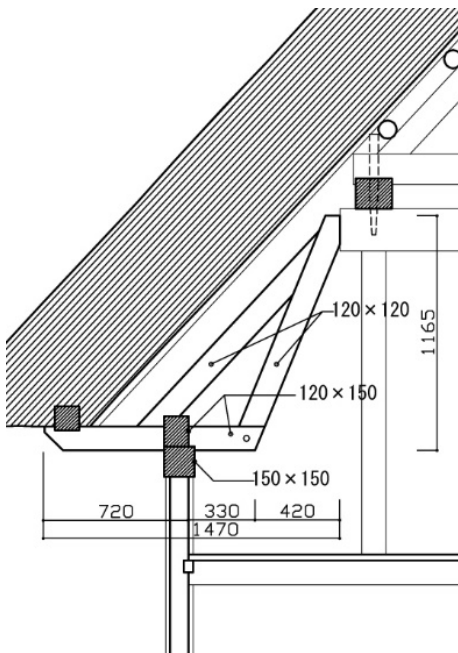


fig. 27 三角形の軒先構造のディテール

会津地域では、軒先をせがい(船柁)造りにしている民家をみかける。せがい造りとは、近世の民家において側柱上部から腕木を突出して小板を張った棚をもつものを指す※2。北関東では二階の床をせがい造りで張り出させて養蚕のための床面積を確保した民家があるが、会津地域では、軒先の出を多くしながら積雪に耐える工夫としてこの構法が用いられている。諸説あるが越後大工によって伝えられた技術であると言われている。会津只見の中門造り分布調査では、中門造りと認められたほとんどの民家がせがい造りであった。

実測調査を行った黒谷船木家は、このせがい造りの腕木の構造が特徴的で、内部で鋭角な三角形を構成しながら母屋桁ないし繫梁端部に固定されていた(fig. 26)。この腕木の部分は外壁廻りに設けられた二重の桁行梁に挟まれて固定されていた。また、上部の桁行梁は、三角形の内部に通されていた。この部分の斜材は、母屋桁によって分断している扱首の役割も兼ねていた(fig. 27)。さらに特徴的なのは、下部二辺の接合部がピン構造になっており、同構法で造られた布沢地区の中門造り民家では金属で止められていた(fig. 30)。

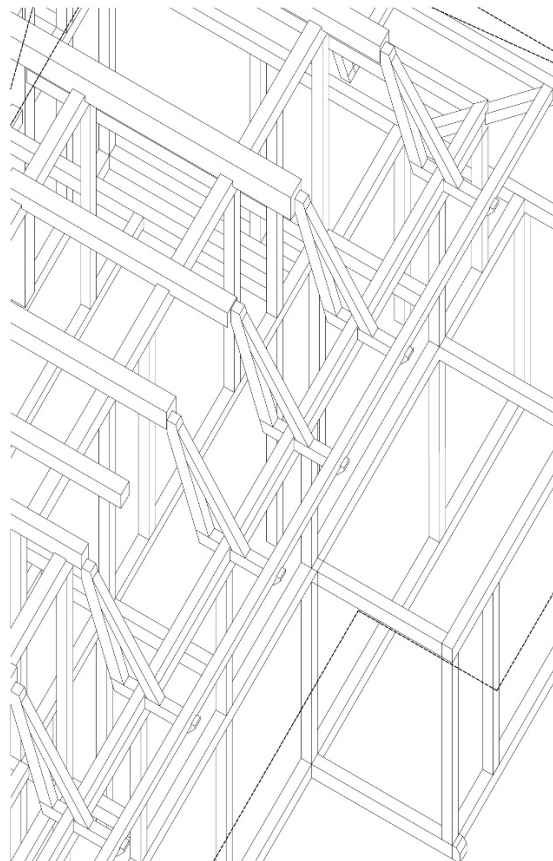


fig. 28 軒先構造のアクソメ図

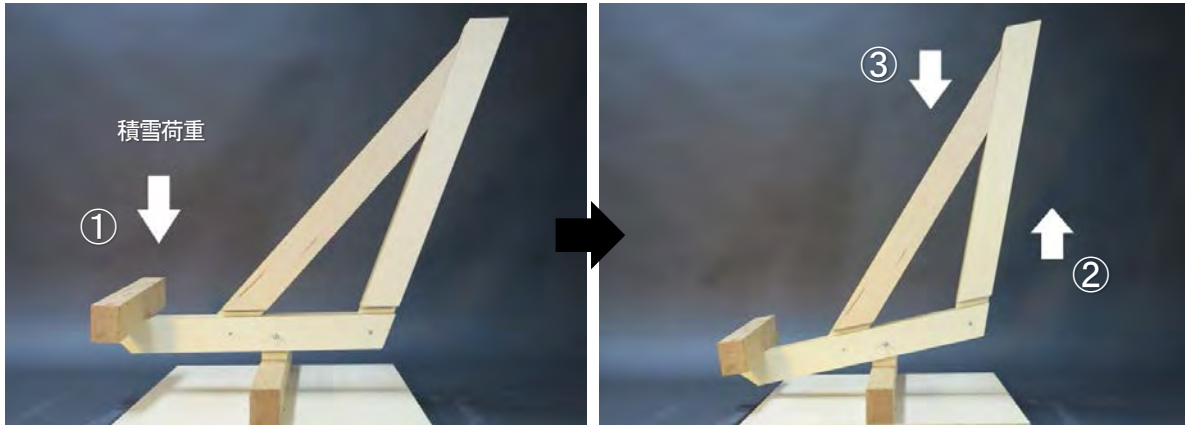


fig. 29 軒先天秤構造の模式模型



fig. 30 同構法を用いた布沢地区の中門造り民家



fig. 31 実測をもとに製作した軸組模型軒先部分
模型製作・船木美沙

何故このような複雑な軒先のディテールを構成したのかを検討するために、模式模型を製作し構造設計の専門家と分析を行った。建物全体と積雪荷重の分散や軒先構造の負担等の解析は今後の課題であるが、軒先については天秤構造として機能しているという見解に至った。

只見のような豪雪地では、軒先の積雪荷重の負担は過剰であり、聞き取り調査でもあったように、雪下ろしや雪掘りが遅れると軒が崩れたり、扱首が折れる原因となる。そのためこの地域では高窓から雪掘りをして屋根に出て雪下ろしをする。また、コーシキと呼ばれる人の背丈ほどの柄の長いへらで、軒先の雪を割るなどして軒が折れるのを防いだということであった。軒先に雪が溜まると、桁行梁との接点を支点にして軒の腕木が下がろうとするが (fig. 29・①)、内部の三角形フレームがピン構造を伝って持ち上がる (fig. 29・②)。この三角フレームの頂部は母屋桁や繫梁に固定されており、それら全体を持ち上げようとするが、三角フレーム頂部の母屋桁等もその外部の積雪荷重によって押し戻され (fig. 29・③)、全体で軒先が垂れるのを防ぐ天秤構造となっている。

積雪に対しての有効性については、今後の現地観察や実証実験を行う必要があるが、只見地域の構法の技術継承や、職人独自の創意工夫があったことは

間違いないと考えられる。また、「7.」で触れるが、この住宅を造った大工棟梁が只見を拠点としていた越後大工のもとで修業し、棟梁として独立した後は、この黒谷地区や自らの出身地であった旧小梁村近くの布沢地区で多く仕事を手掛けたことも今回の研究で明らかとなった。

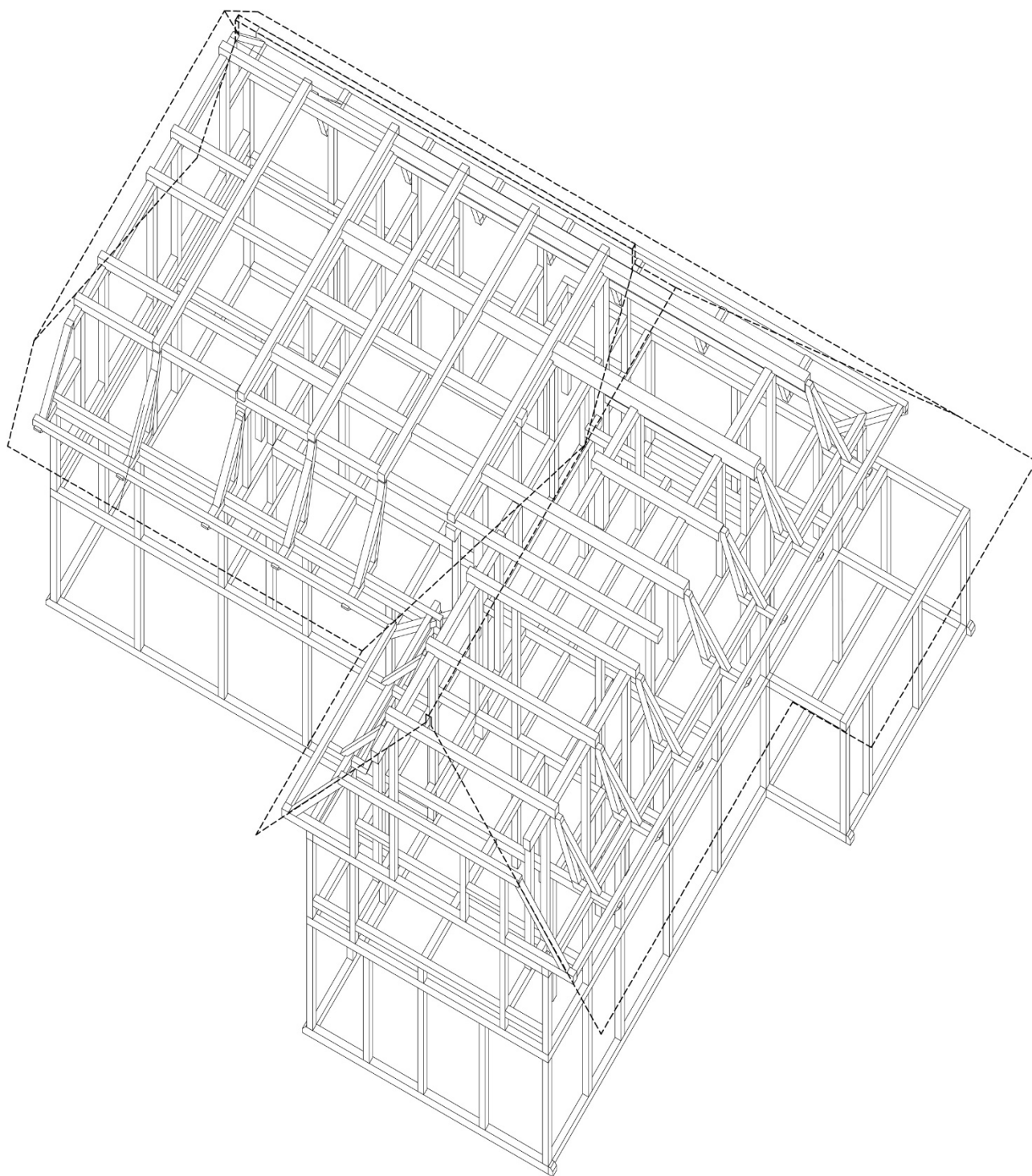


fig. 32 アクソメトリック図法を用いて描いた構造フレーム



fig. 33 実測をもとに製作した軸組模型 全体



fig. 34 実測をもとに製作した軸組模型 軒先

模型製作・船木美沙

7.黒谷旧船木家の技術継承と番匠巻物について



fig. 35 黒谷旧船木家の小屋裏にあった棟札

黒谷旧船木家の実測調査では、棟札から上棟の日付と大工棟梁の氏名を確認できた。上棟は「大正4年(1915年)11月8日」で、大工棟梁の氏名は「堀金熊太郎」という人物であることが分かった。

会津只見は、職人巻物が伝承されている地域として知られている。平成11～13年度に行われた「職人巻物民俗学的研究—南会津地方を中心として」の調査では、合計443の巻物が確認されており、小笠原流礼法に関する巻物が212、本山・木挽に関するものが27、屋根葺きに関するものが26、武術に関するものが52と様々な分野、職能に関するものが伝えられている。そのなかで番匠^{ほんじょう}(大工)に関する巻物が45認められる※6。

大工を表す番匠^{ほんじょう}という言葉は、既に中世には用いられており、13世紀後半から14世紀にかけて成立した「職人歌合」にはこの番匠が鍛冶^{ひとつがい}と一番^{ひとつがい}となって登場している※7。

このような職能集団の由緒書は、例えば轆轤師(木地屋)が文徳天皇の皇子、惟喬親王に轆轤を使う職能の淵源を求めた由緒書を所持し※8、諸国行脚の免罪符としたことはよく知られており、このような巻物を偽文書とする位置づけが現在までされてきた。

会津只見の番匠巻物は、大工の由来譚、儀礼次第などが記され、これを所有することは一人前の証であり、逆にこれを所有していないと地域では仕事を任されないお墨付きとされたものであった。巻物は、棟梁に弟子入りし、5年程度の修行と1年の礼奉公を務めたのち、小規模の建物の設計施工ができるようになった段階で棟梁から伝授される。巻物は棟梁が所持しているものを、住職など筆の達つ者が書き写す形で伝授される※6。聞き取り調査では、近年になってからの継承経路については、不明瞭な点(必ずしも棟梁のもとで修業をした者ではない者が継承する等)も聞かれたが、巻物末尾に記された伝授受者の記載については信頼性があり、これを辿ることで、技術継承がどのような経路でされたかを考察することができると考えられる。

黒谷旧船木家の棟札にあった「堀金熊太郎」という名は、下福井地区の渡部喜信氏が所有する「木工祭方秘事」(大正5年)に伝授経路として以下のように記されている。

越後国西谷郷渡邊河内亮→岩代国小梁村堀金熊太郎→朝日村黒谷柳林角三郎→

下福井渡部五郎→下福井渡部喜信



fig. 36 番匠巻物 写真・船木美沙

会津只見に入っていた越後大工については、新潟県刈羽地方の三派の大工集団が西会津、只見黒谷、九々生を定宿、すなわちワラジヌギバとしていたという※6。

前述の堀金熊太郎に技術を伝えた渡邊河内亮の出身地である越後国西谷郷は、現在の長岡市西谷、旧三島郡越路町大字西谷であったと考えられ、刈羽郡に隣接した地域である。

会津地域に限らず、福島県内では、越後大工の手によると伝わっている民家や蔵を数多く見かける。越後大工といっても、柏崎大工や出雲崎大工、間瀬大工などいくつかの地域に分かれ、この3地域も現在の新潟市西南から柏崎市にかけて近接し

ているため、西谷郷出身の渡邊河内亮がどの地域の木工に属するか不明であるが、間瀬大工とは異なる可能性が高いと考えられる。

また、堀金熊太郎の出身地である旧小梁村は、現在の只見町明和地区で、昭和28年に布沢村、八幡村と合併して明和村となっている。現在の布沢地区に黒谷旧船木家と同様の軒先構造の住宅があることから、大正期に堀金熊太郎か、彼と同等の流れをくむ技術の木工によって施工されたことが考えられる。

8. 考察と結び

会津只見には現在でも120余の中門造り民家が残り、軒までの高さが高く、多くが兜形状に切りあがってそこに開口部を有して、冬季には二階の高さに相当するこの開口部から外部に出入りしていたことが分かった。また、軒の出が多く、積雪荷重に耐えられる工夫としてせがい構造を用いており、大正期の民家の一部には、扱首とせがいで天秤構造を成す三角形のフレームを取り入れていたことが分かった。また、この技術を試行した木工である堀金熊太郎は旧小梁村の木工であるが、越後大工、恐らくは間瀬大工とは異なる刈羽地方、或いは隣接した地域の木工の技術を継承し、その後、黒谷、布沢地区を中心に仕事をしたと考えられる。

「延享三年正月只見村差出帳」(延享三年=1747年)には、只見地域の戸数100軒、人口445人に対して木工の職能を有する者は僅かに1人という記録がある※6。これは只見地域に木工が極端に少ない時期があったことを伝えている。また、「往来^{いりびと}入人改帳」(1867年)では、八十里峠を越えて月毎で200人以上が出稼ぎで往来し、木挽、木工、桶職人等が只見に入ってきていたことが伝えられている。特に越後大工は、積雪に耐え得る頑丈な家を造り固い仕事をする事で評判だったという。村の在職人は専門のものは少なく、農業を本業としながら複数の技術を兼ねる職人である場合が主であったという※5。よって豪雪地での中門造りという点では、専門的技術に頼る傾向にあり、越後大工が重宝がられ、村のシステムとしてのワラジヌギバ(部外者が一定期間滞在したり住み着く場合、特定の家や主人を親元として頼って入村する)が確立していたと考えられる。

また、明治期から家内工業として養蚕業が盛んになり、養蚕技術が進むにつれて会津只見の中門造り民家も養蚕を行う場として機能するようになる。階高の高い民家の小屋裏の、中二階と高低差のある天井を用いて上蔭の作業場を確保し、兜屋根の開口部で換気と採光を確保する等の工夫をした。会津只見では風穴を利用して蚕の種(卵)を保存し、飼育回数を増やすなどした。これにより農家の現金収入が増え、ムラ役として行われていた茅葺き屋根の葺き替えも各家で職人を雇って行うようになり、ムラ役も衰退するようになっていったと考えられる。

会津只見の中門造り民家は、柱・梁も太く、階高が高く兜屋根による開口部が設置されている点で、現代的な

住宅への改修や民宿への改装等、他の民家に比べると利用価値が高いと考えられる。一方、民家としての共通の問題点(基礎が弱い、断熱が施しにくい、耐震性の確保等)を解決しようとする高額な改修費用を要することも事実である。しかし、以上のような中門造り民家としての魅力や歴史性を、今後に残すに相応しい建物であることもまた事実であるだろう。

注釈

- ※1 「建築大辞典第二版」 彰国社
- ※2 「建築大辞典第二版」 彰国社
- ※3 伊藤ていじ著「民家は生きてきた」 美術出版社
- ※4 「湖底に沈む奥会津石伏の歴史と民俗—只見町石伏集落学術総合調査報告」 只見町 1984
- ※5 「只見町史第3巻民俗編」
- ※6 「只見町文化財調査報告書第8集・会津只見の職人巻物」 只見町教育委員会
- ※7 網野義彦著「日本の歴史をよみなおす(全)」 ちくま学芸文庫
- ※8 網野義彦著『「日本」とは何か』 講談社学術文庫

図版

- fig. 1 佐瀬与次右衛門著「会津農書」 国立国会図書館デジタルコレクション
- fig. 2 「湖底に沈む奥会津石伏の歴史と民俗—只見町石伏集落学術総合調査報告」 石伏住居主屋類型の変遷を参考に作図
- fig. 17 「さす組み」と「おだち組み」 安藤邦廣著「茅葺きの民俗学—生活技術としての民家」はる書房
- fig. 30 同構法を用いた布沢地区の中門造り民家 写真提供・斎藤隆夫
- fig. 31・33・34 実測をもとに製作した軸組模型軒先部分 模型製作・船木美沙
- fig. 36 番匠巻物 写真・船木美沙

参考文献

- 「湖底に沈む奥会津石伏の歴史と民俗—只見町石伏集落学術総合調査報告」 只見町 1984
- 「只見町史第3巻民俗編」
- 「只見町文化財調査報告書第8集・会津只見の職人巻物」 只見町教育委員会
- 今和次郎著「日本の民家」 岩波文庫
- 宮本常一著「日本人の住まい—生きる場のかたちとその変遷」 百の知恵双書
- 網野義彦著「日本の歴史をよみなおす(全)」 ちくま学芸文庫
- 網野義彦著『「日本」とは何か』 講談社学術文庫